

研究論文

日本語教育における「ノダ」文の 統一的な解釈の試み

～設定事態と焦点との相関から～

Attempting a Unified Interpretation of "no da"
in the Teaching of Japanese Language
— from the Correlation of Focus and Presupposition —

林 林

Lin LIN

<要 約>

本稿では、日本語教育と日本語学習者の立場に立ち、設定事態（従来のいわゆる前提）と焦点（成分焦点と文焦点）との相関から「ノダ」の機能を捉え、「ノダ」は、主に発話者が主観的に設定された事態の関連事項に対する確認を聞き手に言表するマークであるとして、日本語学習者に把握しやすい統一的な解釈を提案する。

<キーワード>

日本語教育、ノダ／のだ、前提、設定事態、フォーカス、焦点、確認ムード、モダリティ

1. はじめに

日本語の文末表現の一つである「～んです」「～んだ」「～の」といった、いわゆる「ノダ」と呼ばれる表現は、その解明が難しいことからこれまでに、その解釈の仕方をめぐって、「説明」（久野 1973、田中 1979、寺村 1984、奥田 1991）、「換言」（山口 1975）、「背後の事情」（田野村 1990）、「因果関係」（松岡 1987）、「課題一解答」（益岡 1991）、「情報の付加」（菊地 2000）などさまざまな解釈の提案がなされてきた。そのとらえ方には、大まかに分けて、久野（1973）、寺村（1984）、奥田（1991）、石黒圭（2000）など統一的にとらえる観点と、小金丸（1990）、野田（1997）など、「ノダ」の機能をスコープとムードに二分割して説明する立場という二つがある。

二分割して説明する立場のなかで比較的新しい展開を見せるものとして、庵（2000）、庵他（2000）で示された「前提」の「ノダ」（＝スコープの「のだ」）¹⁾と関連づけの「ノダ」（＝ムードの「のだ」）という二つの概念を使って「ノダ」を説明する考え方がある。しかし、庵他（2000）では単に疑問文の前提有無の条件提示にとどまり、前提と関連づけに共通する

「ノダ」の性格は何か、そしてなぜ同じ「ノダ」という言語形式で表せるのかは、それほど詳しく言及されているとはいえない。結局、前提の有無は、「ノダ」使用の動機付けと関連させて十分に説明されているとはいえないのである。

また、小金丸（1990）等では「スコープの『のだ』」は『の』によって前接する部分を名詞句化し、その名詞句化した部分を否定等のスコープに入れる。そうすることによって、その中の一部を否定等の焦点にするという機能を果たすものである」（小金丸 1990:75）とされていることから、「ノダ」はフォーカスする機能も果たすというのが従来の観点のようである²⁾。しかし、ここで注意を要することは、後の議論で触れるように、非「ノダ」文にも焦点があることである。したがって、小金丸等の解釈に依拠した場合でも、非「ノダ」文にも焦点があるのになぜ「ノダ」を使わないのかという点が明確にならない限り、日本語学習者という立場から見れば、その語感の把握が容易ではなくなってしまうのである。

他方、菊地（2000）は「共有されている知識・状況に関連する、未共有の知識（付加的情報）を補う」形式として「ノダ」を統一的な観点から捉えている。しかし、この用法の規定が簡潔であるだけに、以下のような聞き手の存在が問題にならない例を説明しきれない面がある。

(1) (朝起きて道路がぬれているのを見て) そうか、ゆうべ、雨が降ったんだ。

その上、菊地（2000）は次のような例も上記の用法から外れるとしている。

(2) [唐突に] 僕ね、今晚デートなんです。えへへ。

また、石黒（2000）は、発話時の「ノダ」を選択する条件を4つ設けた上、話し手と聞き手の認識に注目して、さらに9通りに分類し、それぞれのグループの「ノダ」の性格について論じた。ただし、極めて細分化したルールが示されているにも関わらず、いわゆる前提と焦点の相関については触れられていない。

大まかにいえば、これまでの研究において、構文上の制約以外にも、聞き手が情報の内容を承知していない（とみなされる）ことや、逆に情報の内容を承知している（とみなされる）ことが、「ノダ」使用の条件、あるいは「ノダ」使用の自然さを左右する要因にあげられたりするなど、話し手の表現意図から独立した客観的な事実関係を「ノダ」使用の条件とみなす解説が多く研究者から提示されている。たしかにそこからは、日本語学習者にとってもいくつもの具体的で有益な指針が得られている。しかし一方で、これまでの研究は、ほとんど客観的な事実関係を条件とするルールをきめ細かく規定した上に、さらに「ノダ」使用が自然な場合、「ノダ」不使用が自然な場合、どちらも使い分けられる場合などを綿密に細分化してルール化している。そのような母語話者にとっても難解なルールは、「ノダ」使用の指針を

渴望する外国人学習者にとっては、頭を整理することに役立つばかりか、混乱を助長する結果になりうるという指摘もある³⁾。

「ノダ」に関する研究論文の多くは、それを消化するのはなかなか困難なものであり、まして日本語教育の授業に生かそうとしても、言語学的観点からの専門的な論文はそのままでは使いづらい内容のものが多く、日本語教育の現場でしばしば遭遇する「ノダ」の表現は、一体「ノダ」がどのような表現なのか、また、一体どのように説明すればよいのかなどについて、日本語教育に携わる者を大いに悩ませる問題となっているのである。

このような事情を鑑みて、本稿では、日本語教育と日本語学習者の立場に立ち、これまでの研究のよいところを踏まえ、いわゆる前提と焦点との相関から「ノダ」を統一的にとらえた上、日本語学習者に把握しやすい解釈を試みて、その困難な問題に取り組んでみようと思う。

2. 問題点を踏まえた本稿の立場

2.1 「ノダ」文の前提

「前提」「Presupposition」といえば、論理学における前提と言語学の前提とはかなりかけ離れているのは事実である。そして、研究者の間でも必ずしも同じ意味で使われてきたわけではない。例えば、話者が行う行為および話者の知識状態に関わる概念として「Presupposition」を定義する研究と、話者の行為や知識状態とは独立した、文と文との意味的な関係として定義する研究等がある。通常、よく議論に取り上げられるのは、例えば、「彼は殺された」は「彼は死んだ」を含意するが、その否定「彼は殺されなかった」は「彼は死んだ」を含意しない。従って、「彼は死んだ」は「彼は殺された」が含意 (entail) する命題ではあるが、前提ではないというようなケースである。ほぼ、命題 P とその否定 $\neg P$ がどちらもある命題 Q を含意するとき、 Q は P の前提であるといった定義のように命題の真偽にかかわっているものである。

しかし、庵 (2000)、庵他 (2000) で示された「前提」という概念は、その議論から、上記の意味での前提という概念とは若干ずれた概念である。庵他 (2000) では、疑問文を、「その文が正しいかどうかを尋ねるために使われるもの」と、「その文が正しいことを知った上でその文の一部の成分を特定するために使われるもの」 (庵他 2000 : 283-284) とに機能的に分け、後者の、「話し手が正しいことを知っている部分」をその文の「前提」とよび、「話し手が特定したい部分」をその文の「焦点」とよぶ。そして、後者にのみ「ノダ」は使われるとし、「ノダ」が必要な場合を次のような場合とする。

①疑問文中に疑問語 (疑問詞) が含まれている (疑問語疑問文の) 場合

(3) 田中さんは何を見たのですか。(映画の話で)

②疑問文中の成分が音声的に強調されている場合

(4) 田中さんは『タイタニック』を見たのですか。

③疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合

(5) 田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

以上のようなルール化の仕方から、「ノダ」を使う場合には「前提」が必ず必要であるという点の強調が読み取れる。しかし、命題の真偽にかかわる前提の場合、「話し手が正しいことを知っている部分」は必ずしも前提として成り立つとは限らないのである。このように、「ノダ」の用法を考える場合、単に疑問文でのルールを示すだけでは、その全体像がみえてくるわけではないと思う。というのは、「ノダ」疑問文において、「彼は死んだ」が前提として成立しなくても、「彼は死んだ」を前提に想定すれば「彼は殺されなかったんですか」と発せないこともないからである。これで、「ノダ」がかかわるのは前提でなく、まさに含意する命題であり、つまり、命題の真偽という前提の有無をベースにしないことを示している。そういえば、庵他（2000）の言及した規則では、前提が成立しないとしても、やはりその質問文は成り立つであろう。

さらに、次の（6）（7）のような場合には、以上の①～③のようなルールでは十分に解釈できない。

(6) (前略) とにかく、パンドラは、次のように考えたはずである。

前提：〈小箱の中になにかが入っている〉はずだから、

疑問：1) 小箱の中になにかが入っているか。

疑問詞「なに」を含む疑問文にあっては、その前提として「なにか」を含む命題が予定されている。(小泉 1990:232)

(7) 疑問：5) パンドラは、人間に災いをもたらしたか。

という疑問文にあっては、

5') パンドラは、人間に災いをもたらした。(肯定)

5") パンドラは、人間に災いをもたらさなかった。(否定)

のように、肯定命題と否定命題が前提をなして、どちらを選択するか、聞き手に尋ねていることになる。(小泉 1990:233-234)

(6) (7) にみられるように、非「ノダ」構文にも同じく前提が含まれ、「ノダ」の使用はいわゆる「前提」と必然的な関係をもたないようである。このことから、前提の有無はあくまで話者の心理的な重要性にかかると、つまり、言語主体の意識における認定の度合にかかわっていること、また、前提に対する認定および表現は、主観的な、かつ動的なプロセスであることが分かる。「ノダ」の使用は必ずしも疑問詞、必須成分以外の成分に必然的な関係を持つとは限らないと考えられる。

これは、まさに小林（2009）が取り立て詞をとらえる時に指摘した問題と同様に、今まで

の研究では、ある程度、前提の概念に混乱が見られたことから発生した問題である。

「前提句=前提」ではない。対比の「は」は否定極性を持つため、前提句と前提の極性が逆になる。例えば、「花子はケーキは食べた」の文から作られる前提句は「花子がxを食べた」であるが、前提は「花子が（ケーキ以外の何か）を食べなかった」である。これまでの研究は前提句と前提を混同してきたために、前提に加えて語用論的含意をも設定せねばならないなど、複雑な説明が必要であった。（小林 2009：32）

ここで、例えば、もし「花子はケーキは食べた」に対して「ノダ」でその関連事項について発話すれば、「あの店でケーキを食べたんですか。」「どこで食べたんですか。」などの文も成り立つことができよう。その場合、明らかに「花子がxを食べた」という前提句をベースに発話するのである。そうしたら、庵他（2000）等のいわゆる「前提」はまさに小林が指摘した「花子がxを食べた」という「前提句」のようなものと看做されてもおかしくはないと思う。こうして、「ノダ」の使用は、前提の真偽如何との関係が薄いことから、いわゆる「前提句」、つまり「含意」する命題のすべてとかかわっていると考えられる。従って、「ノダ」の関わる「前提」というものは、真偽を云々する場合の前提とは異なり、ある意味で、発話者が主観的に認定した事態と言えるであろう。そのような前提についての議論はそもそも性質の違うものによると思われる⁴⁾。

このように、「前提」という概念がそもそもかなり複雑な問題を含んでおり、その上さらに「ノダ」が絡んでいるために、特に「ノダ」の語感が弱い非母国話者をよりいっそう混乱させる原因になってくることになる。したがって、「ノダ」を説明する場合、「前提」という用語を慎重に扱う必要があると思われる。よって、本稿では、発話者が予め主観的に設定した已然事態をベースに発話する際、「ノダ」を使用するということを仮設して、以下「設定事態」と称して「ノダ」を捉えていくことにする。

2.2 「ノダ」文の焦点および設定事態との関係

焦点の理解も、理論の枠組みによってさまざまな概念が混在している⁵⁾。本稿では、新情報、旧情報の説に従わず、劉鑫民（1995）の見方に基づいて焦点を捉えることにする⁶⁾。つまり、情報とは、伝達を完遂させるために、発話者が心理的にもっとも重要性が高いと認めた言語成分であり、発話者が意図的に取り立てたり、強調したりしようとする対象でもあるので、むしろ情報焦点と呼んでいい。ここで指摘したいのは、情報焦点が情報の新旧と必然的な関係がなく、主に文の成分に含まれる情報の心理的重要性、つまり、成分に含まれる情報の言語主体の意識における重要度の如何にかかわっているということである。従って、本稿では、焦点を単純な語用論的な概念、または単なる構文上の概念と見なさず、意味、統語および語用など広くかかわる言語現象として捉えていく。

焦点と構文の成分の対応について、Lambrecht (1994) はまず焦点を狭い焦点と広い焦点に二分し、前者が構文の単一成分に焦点を当てるのに対し、後者は2つ以上の構文成分に焦点をあてるものであり、それはさらに文焦点と述語焦点に下位分類されるとする。しかし、(8) (9) に示されたように、「ノダ」構文において狭い焦点にしても広い焦点にしても、明らかにいずれも構文(単文の)成分に対応することから、本稿ではこれを一括して成分焦点と呼ぶことにする。(以下はfを焦点のマークとする)

(8) A : [今日]^f食べたんですか。

B : いいえ、[昨日]^f食べたんです。

(9) A : 昨日、その店で[お惣菜を買った]^fんですか。

B : いいえ、[お惣菜を買った]^fんじゃないくて、[油あげをもらった]^fんです。

一方、文焦点は(10) から見られるように、設定事態の関連事項となる文全体に光を当てている。その際、背後にある原因なり、結果なりの設定事態の関連事項が丸ごと表に晒されるようになる。よって、構文形式上、これを単独で文焦点として立てるのがふさわしいと思う。

(10) 管理人は相槌を打ってから声をひそめるようにして、

「おたく、ドロボウには入られませんでしたか」

「ええ、べつに……」

「それならば、よろしいけど」

「[だれか……被害にあった]^fの？」

「ええ、お二階のかたが……。[この頃、この付近で多い]^fんですって」 (マ:87)

そこで、「ノダ」文において、文焦点の形で設定事態の関連背景たるものが顕在化されてきたことになる。とはいえ、形式上、顕在化の程度差がないというわけでもないが、比較的分けやすいのは、「どうして～か」という直接原因質問のケースである。例えば、石黒(2000)が(11)を「体調が悪かったから、会議に出席しなかったんです」とするのは、その関係を示している。

(11) A 「どうして会議に出席しなかったんですか」

B 「体調が悪かったんです」

こうして、談話中に文焦点となる文は、単独の一文として発話されるケースが多く見かけられる。よって、以下、焦点を成分焦点と文焦点に分けて「ノダ」と設定事態との関連づけ

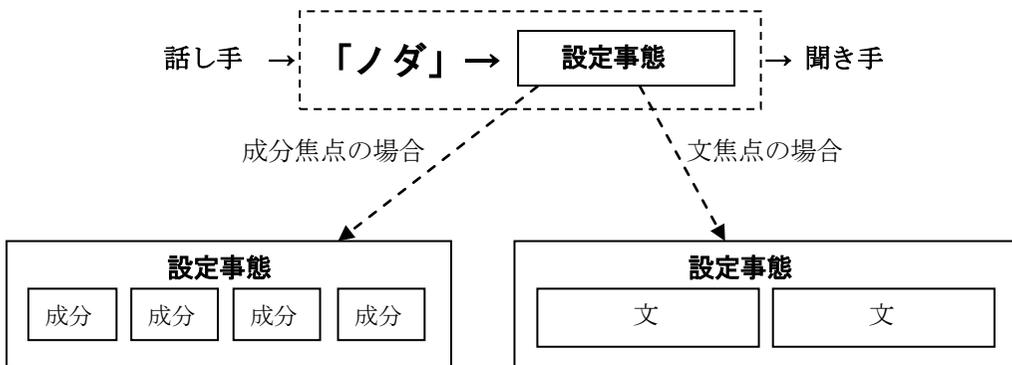
を捉えていく。設定事態と焦点の関係については、方梅（1995）の立場に同調する⁷⁾。即ち、一般的に焦点は発話に示された情報であるのに対し、設定事態はこの顕在的な情報の背後に潜んでいる情報のことであり、両者は相互依存の関係にある。そして、焦点の特定は設定事態によって左右されるものとする。

2.3 統一的な解釈の提案

石黒（2000）は、庵他（2000）のいう前提を不十分な認識とし、認識が不十分だからこそ、十分な認識との間に認識のギャップ、つまり認識の空隙が生まれ、「ノダ」というマーカを付して、そのギャップを埋める必要が出てくるのであるとする。こうして、庵他（2000）のいう前提という概念は、ムードの「ノダ」にも拡張できると指摘した。例えば、(11)のBの発話を「体調が悪かったから、会議に出席しなかったんです」とすればスコープの「のだ」になるので、両者を一連のものとしてとらえられると言及している。しかし、ここでの「認識」というのは、非母語話者にとって、やはりどんな場合の認識かが曖昧で、具体像がはっきりするとは言えず、学習者にとって把握するのが難しい。

そこで、本稿では「ノダ」を、情報伝達時の設定事態、焦点と絡んで機能する一体的なものとして把握した上で、確認の伝達ムード（モダリティ）を果たすマークと見なし、図1のような設定で捉えていく。議論の便宜上、「～のです」「～んだ」「～のね」「～のよ」などといった変体を「ノダ」と同一視することを断わっておく。

図1



3. 「ノダ」を統一的に捉える提案の検証

3.1 焦点の対象はあらゆる成分（意味範疇）

前節に述べた設定事態と焦点の関係に従い、いわゆるスコープの「ノダ」は、成分焦点を含む設定事態を示すものと理解することができる。この「ノダ」は中国語の文末「～的」の機能と性質が同じようなものであると言える。例えば、

「太郎が浮気をしている」という命題が真であることは保証されていないように感じられる。これに対し、(21)では「花子は『太郎が浮気をしている』ということを知っているのではなく、疑っている」のような解釈が強制され、その中で従属節の命題が真であることが前提されているように感じられるとしている。

ここでの命題が真であるかどうかの問題を検討の範囲外にするが、少なくとも、必須要素を含め、複数の焦点が選択可能となることを示唆した。これを参考に、(15)～(19)の対応する否定文を明示することによって検証してみる。

(15') [私が]^f今日駅でお弁当を買ったのではない。[彼が]^f今日駅でお弁当を買ったのだ。

(16') 彼が昨日駅で[おにぎり]^fを買ったのではない。彼が今日駅で[お弁当]^fを買ったのだ。

(以下省略)

ちなみに、以上の例文から、「ノダ」構文の発話は、発話者と聞き手がある設定事態をめぐり、その関連事項のいずれかに対する認定にギャップがある場合、ここで特にその部分への認定の正否について確認を求めたり(質問文)、相手のその部分についての認定を修正したり(否定文と平叙文)する広義的な確認行為であるということが示されている。こうして、以上の否定文の対比項から、すべての成分は焦点となりうる事が分かる。つまり、関連事項のすべてが確認の対象となりうるのである。

3.2 焦点の自動獲得

異なる言語ではそれぞれ、情報焦点を扱う独自の構文的または語彙的な手段を持ち合わせている。そのうち、例えば疑問詞のように、その自身の語彙的な特性により、そもそも焦点の性質を備えており、このような成分が文に出てくる場合には、焦点は必ずと言っていいほどそこに当たることになる。例(6)、(15)～(19)から分かるように、「ノダ」の有無を問わず、疑問詞はおのずから焦点の顕在的なマークとなるわけである。

このように、疑問文の焦点は、ほぼ疑問詞に置かれ、それに、平叙文と疑問文では情報焦点が互いにつりあいの関係にあるため、質問文の焦点構造とその応答文の焦点構造も一致するはずである。平叙文においては、疑問文の疑問詞に対応する部分が当然なことに、焦点となってくる。そこで、(15)～(19)での対応が示されるように、疑問文を目処にして平叙文の焦点構造を捉えることができるようになる。ただし、こういった状況はただ疑問詞のある疑問文にかぎって見られる現象で、疑問詞のない疑問文(23)と平叙文(24)においては、文脈の特定がない限り、焦点の位置は定かでなくなる。例えば、(17)にとっては、(22)のAは適切であるのに対し、Bは不自然となる。反対に、(19)にとっては、(22)のAは成り立たないが、Bは妥当な文とは言えないであろう。また、(23)の質問に対し、(15)～(19)

はすべて可能な回答となるのである。

(22) A: 駅で買ったんです。 → [駅で]^f買ったんです。

B: 駅で買ったんです。 → 駅で[買った]^fんです。

(23) 彼が今日駅でお弁当を買ったんですか。

(24) 彼が今日駅でお弁当を買ったのです。

以上の例から、「ノダ」構文にだけではなく、発話の文である以上、すべて焦点があるはずだということが示されている。もちろん、「ノダ」文においても、疑問詞が焦点となるのはその語彙的な属性によるもので、「ノダ」が焦点をあてるわけではないと思われる。

3.3 焦点獲得の他の方式

次に、焦点獲得の他の方式についてすこし触れていく。前節でみてきたように、焦点の選択に影響する成分があるものの、成分の性質によっては焦点となる可能性が違ってくる。

(24) に限ってみれば、「ノダ」の左側にある意味範疇はすべて焦点になりうるが、文脈を特定しないかぎり、特に複数の成分が同時に並べられる場合、「が」で受ける成分が焦点となる優位性がかなり強くなり、しかも質問文や否定文においても同じ傾向が見られる。

(24') [彼が]^f今日駅でお弁当を買ったくんですか/んだ/んではない。

この点に限ってみると、日本語の格助詞は格関係を表す他、フォーカス機能も兼ねていると言えるであろう。例えば、

(25) 「私たちもあそこで、それを見たんです」と、その体験談を E さんたちに話した。(新:67)

(25) では「あそこで」という非必須補語があったとしても、焦点は明らかに「私たちも」のところに当てられている。これがほかでもなく、取り立て助詞「も」が言外の意を表す時の語用的な機能によるものである。したがって、「ノダ」文では、「必須補語の以外の要素」というのは、いわゆる前提の有無と焦点の位置を規定する条件として無理があると思われる。一方、(25) の「～んです」は「私たちもあそこで、それを見た」を文焦点として、設定事態の関連事項（原因、結果など）への確認を提示すると同時に、相手の設定事態の関連事項への認識のギャップを修正したことになる。

また、同じ設定事態の下で、成分を前に移動することで焦点の優先順位を得ることができよう。

- (26) 昨日、私が田中さんと食堂でお弁当を食べたんです。
 (27) A [昨日]^f、田中さんと食堂でお弁当を食べたんです。
 B [田中さんと]^f昨日、食堂でお弁当を食べたんです。
 C [食堂で]^f昨日、田中さんとお弁当を食べたんです。
 D? [お弁当を]^f食堂で昨日、田中さんと食べたんです。
 E 昨日、食堂で田中さんと[お弁当を]^f食べたんです。

ここから、統語構造に比べ、情報焦点の構造はより安定していることが示される。言うまでもなく、言語構造の根本的な目的は情報を効率的に伝達することから、時によっては、最も明確に情報伝達をしようとするには構文形式を変えるのが近道であろう。Kuno (1987) は、ある言語には選択可能な語順が二つ以上ある場合、具体的な文脈において語順の選択は常に情報伝達の需要によって行われるものと指摘した。それゆえ、(12)～(14)のように、中国語の「是」のような、焦点を際立たせる専用のマークもあれば、英語の分裂文のような特殊な文型で焦点を取り扱う形式もある。(16')の表現について言えば、日本語では「お弁当」を強調する場合、通常次のような形式をとるのが最も自然であろう。

(16'') 彼が昨日駅で買ったのは[おにぎり]^fではない。[お弁当]^fだ。

事実上、これらのフォーカスする成分や構文形式などが現れる場合、焦点がほぼ自然にそれによって定められたのである。ただし、現実な言語生活の中で、(28)のように特別な伝達の意図がない限り、複数の成分が同時に顕在化となるのは極めて少ないことで、これは言語の経済性原理が機能している現象であると思われる。

(28) 「あの女の人は、こんな時間に、あんなところでなにをしていたのだろう」(新:172)

従って、(27)は通常(29)の形式をとるのがより自然に見えるわけである。同じく、(15)～(19)、およびその質問または否定の形式もこうすれば、設定事態の確認すべき箇所も一目瞭然になってくる。

- (29) A[昨日]^f食べたんだよ。
 B[田中さんと]^f食べたんだよ。
 C[食堂で]^f食べたんだよ。
 D[お弁当を]^f食べたんだよ。
 E お弁当を[食べた]^fんだよ。

このような省略によって情報焦点を絞り出す構文手段は自然言語では多く見てとれる。

- (30) エレベーターの中は鈴なりの人、人、人……。 (中略) と、A 子さんはその異様に驚いていると、いきなり、
「下に行きます。乗るのですか、乗らないのですか？」
と、中のひとりに尋ねられた。(新：146)
- (31) 「...たちまち、わたしは大金持ちになりますよ」「どんな方面に売り込むのですか」
(き:69)

ここで注意すべきところは、(29) の「ノダ」を取り除いても、焦点の有無と位置は依然としてなんら変わりがないということである。

- (29') A[昨日]^f食べた。
B[田中さんと]^f食べた。
C[食堂で]^f食べた。
D[お弁当を]^f食べた。
E お弁当を[食べた]^f。

(6) (7) からも同じく、疑問詞のある質問文では「ノダ」がなくても、依然としていわゆる前提と焦点を含むということを示している。結局、「ノダ」の有無によって変わるのは、このような設定事態の関連事項を提示するムードまたはモダリティーそのものであると言えよう。

さらに、日本語構文の構造からわかるように、「ノダ」は文末モダリティーという階層に位置しているので、「ノダ」の前に出る成分は自然にその機能範囲内に収められている⁹⁾。つまり、これは日本語の統語規則によるもので、いわゆるスコープは「ノダ」の機能ではなく、日本語の構文上の特性によるものであると考えることができよう。こうした日本語特性の影響による焦点への特定方式が他の言語と異なるのは明らかである。例えば、(12) ~ (14) から分かるように、「ノダ」と同じ性質の中国語の「的」が動詞の前後に自由に移動することで焦点の収まる範囲を調節することができるのに対し、日本語では、「ノダ」の移動が不可能であり、焦点の選択は助詞に依存する場合が多いとされる。上述した格助詞と取り立て助詞の機能からこのような影響の一端が見えてくるわけである。

要するに、焦点が「ノダ」のスコープ内に収まるのは日本語の一般的な構文規則に基づく現象にすぎないのである。

3.4 設定事態の関連事項への確認

ちなみに、以上の例と議論から分かるように、「ノダ」疑問文に疑問詞があるとしても、その疑問の度合がかなり薄くなってきており、(30)のように、「ノダ」質問文では、もはや疑問の意味がなくなり、むしろ、主観的に認定された事態の関連事項に対しての確認といってよいであろう。それに対応する回答文は、まさにこういった確認を受けて機能しているのである。

(30) ある老夫婦の奥さんが、急に目が痛い、目が痛い、と夫に訴えた。あわてて眼科にみせたが、(中略)「いつから痛いんですか？どこも悪くないですよ」と、医者も首をひねる。

「昨日、急に痛み出したんです」と奥さんは言う。(新:173)

以上をまとめると、「ノダ」の機能は、発話者が聞き手にことの発生を伝えるという言表ではなくて、肯定の態度を表すことである。換言すれば、「ノダ」文において、疑問であろうと、否定であろうと、平述であろうと、すべて発話者が設定事態をめぐる確認を行う言語表現である。「ノダ」はこのような確認ムードを明示するマークであり、つまるところ態度表明である。そのようなわけで、「ノダ」質問文を、「問い合わせ確認文」と称したほうがより適切ではないかと思う。

そこで、「ノダ」は聞き手に設定事態の存在、及び設定事態の関連事項への確認を示すモダリティのマークであると思われる。

3.5 文焦点および主観性

以上の議論から見ると、「ノダ」の主な機能は焦点の特定と範囲の指定というより、むしろ発話者がその発話内容は設定事態の関連事項への確認だということを主観的に提示することであるといえよう¹⁰⁾。しかも、その提示する先は聞き手だけにとどまらないことを指摘したい。

(31) 「たくさんくれ。[十歳ぐらいだったころのことを、思い出してみたい]fのだ。…」
(き:8)

(32) 「もしもし、もしもし……あっ、切れましたね」と店長。ところが次の瞬間、店長の顔色が変わった。「あの、[ここ、携帯、通じない]fんです……」(新:109)

ここで焦点となるのは、「もっとたくさんもらいたい」「店長が恐れる」という設定事態の関連事項——原因であり、いずれも已然の存在、かつ独立した文形式である。(32)から、「ここ、携帯、通じない」という原因たる事情は、これまですでに自分の脳裏に曖昧な存在とし

であったか、または、忘れてしまったが、今再び、ハット気付いたものへの再確認が読み取られて、発話者が自分自身への確認を行うと同時に、確信するムードも示されている。この確認提示の向かう先は、明らかに発話者自身も含まれているのであろう。

(33) 「すごいものですね。これを使うと、すばらしい夢でも見られるのでしょうか」
(き:7)

(34) 「というと、まだたしかめてないのですか」(き:8)

(35) これからは、どんなぜいたくな生活もできるのだ。(き:32)

(33) (34) (35) において、「ノダ」が提示された設定事態の関連事項は、いずれも事実になっていない未発生のものでありながら、すべて発話者が一方的に已然事態とみなして確認の対象となる。この場合、発話者自身も聞き手となるので、単に「相手に付加情報を提供する」わけではない。従って、現実存在したことも、主観憶測のことも、共に「ノダ」文における設定事態となりうるといえよう。発話に参加する双方が共有した情報でも成り立つし、また、一方的に推測したことで成り立つということで、発話者の主観的な判断に委ねる部分が多いと思われる¹¹⁾。

今村(2007)では、「ノダ」使用には、構文上の制約や情報共有の有無などの客観的な事実関係よりも発話態度のほうが大きく影響しているとしている。そして、次の例をあげながら、「ノダ」使用における個人個人の主観的な制約を示している。

(36) なるほど、きみとはゆっくり話す機会もなかったんだけど、それでもお互いなんとか理解し合えているとは思っていたよ。

(37) なるほど、きみとはゆっくり話す機会もなかったけど、それでもお互いなんとか理解し合えているとは思っていたよ。(今村 2007 : 38)

(中略)

上の(36)と(37)¹²⁾を10人あまりの母語話者に読んでもらったところ、さまざまな反応があった。「んだ」つきの(36)の文に対して、「自分では言わない」、「違和感がある」、「そういう言い方を聞いたら、居心地が悪い」と答える声があるかと思えば、「両方ともオーケーだが、自分なら「んだけど」のほうを使う」とか「どちらもありだけど、身近な人間に「んだ」なしのほうを言われたら、冷たい感じがしていやだ」とかいう感想もあった。そうした違いは、「のだ」による語りかけに対する反応の個人差と考えられる。つまり、性格、経験、思い浮かべる文脈によって、「のだ」文の意味づけに微妙な差が出てくるのだ。

そうした個人差について学習者に伝えることは、混乱を招くだけとして、日本語教育

では避けられることが多い。(今村 2007 : 44)

それで、その聞き手が思い浮かべる文脈について、「想定文脈」は「ノダ」文を聞いたときに聞き手が感じる「自然さ」「不自然さ」「納得感」「違和感」などに深くかかわるとしている。このような「ノダ」の性質から、「ノダ」の使用にあたって、相手の認識が発話者と同調するかどうかは、ほぼ各自の主観的推測を基準とするものであり、実際に聞き手の側に「自然さ」「不自然さ」「納得感」「違和感」などが実在したかどうかとは関係なく、発話者がただ、聞き手において「自然さ」「納得感」があることを仮定して、この仮定をベースに発話したのだということを示すものであるということになる。例えば、

(38) ...男がエサをやっていると、ネズミたちがそわそわしはじめた。いままでに危険が迫った時、いつも示した動作だった。

「ははあ、なにかがおこるのだな。こんどは、なんだろう。火事だろうか、大水だろうか。いずれにせよ、さっそく引っ越すことにしよう」 (き:26)

(38) では、「なにかがおこるのだ」は、「いつもなにか起こる」という設定事態への自己再確認の言表であると思われる。また、「なんだろう」「火事だろうか」「大水だろうか」等は明らかに「なにかがおこるのだ」に基づいての発話である。つまり、「なにかがおこるのだ」は、さらにその後の言表にとって新たな設定事態をなしているのである。ここでは「ノダ」が用いられていないのは、発話者が取って設定事態との関連、または、確認ムードを表す気がなくて、ただその場での推測を表そうとするからであろう。

こうして、設定事態の有無の判断はかなり発話者の主観的なものとなる。設定事態の存在を主観的に認められ、そして相手へ意図的にその関連事項について確認の言表をしようとするのならば、「ノダ」で提示することになる。その一方、もし発話者が発話内容を主観的な設定事態としてとらえようとせず、または、相手に設定事態を言表しようとしなない（設定事態の存在が既存事実であっても）場合には、疑問詞の有無、または非必須補語であるかどうかを問わずに、やはり「ノダ」を使わないこととなる。これこそ、「ノダ」の使用の動機付けだと考えられる。このように解釈してはじめて、(1)の自己発話（設定事態への自己確認）、(2)の一方的な設定事態（他人も共有すると仮想する）の下での発話、および(6)(7)のケースでは、設定事態があるにもかかわらず、なぜ非「ノダ」文（発話者が単にその場での質問を表そうとする）をとるのかという点に関して合理的な解釈を与えることができるようになると思う。

4. おわりに

以上の議論をまとめてみると、「ノダ」は、発話者が設定事態の関連事項に対する確認行為を聞き手に提示するマークである。この場合、設定事態の関連事項がその意味範疇であれば、焦点が文の成分にあたり、関連事項が原因、結果など背景たる要素であれば、焦点が文全体にあたることになる。また、その設定事態は、客観的な既存事態である場合だけでなく、発話者の主観的な設定である場合も成り立つ。そして、「ノダ」によって提示される先は、聞き手の他に、発話者自身も含まれる時もある。その意味で、「ノダ」構文は、発話者が主観的に認定する設定事態の存在を条件に成り立つものであるため、発話者が発話する時、この設定事態とかかわりのないその場の瞬間思惟活動への言表の場合は「ノダ」を使わないことになる。よって、「ノダ」の本質は、確認ムードの提示にあると考えられる。したがって、図1の設定が成り立つと思われる。

以上のような統一的な解釈は、日本語学習者が「ノダ」の機能および構文全体像を理解しようとする際に役立つであろうと思われる。

注

- 1) 庵 (2000)、庵他 (2000) で示された「前提」という概念は小金丸 (1990)、野田 (1997) でいうスコープの「のだ」に別の角度から光を当てたものだと思う。
- 2) 次の議論からこのような理解が伺われる。(下線は筆者)

なぜスコープの「のだ」が文の一部にフォーカスを当てる機能を持つかを考えるとき、すでに述べたように、庵他 (2000) の前提という概念を吟味するとよくわかるのであるが、なぜ「のだ」を使った文に前提が生じるかという、「のだ」に、聞き手もしくは話し手自身の認識の不充分なところを埋めて充分なものにする機能があるからである。(石黒 2000 : 48-49)

「ノダ」を捉える場合、「『の』は名詞(体言)句を構成する」という説明には注意が必要である。即ち、言語学的観点からいえば、「『のだ』は名詞句を構成する」という点が当然のこととされるが、この観点からの説明は「もの」「こと」「の」の意味・用法の区別が相当把握できることを前提とするので、日本語学習者の理解に混乱を引き起こしかねないため、不適だと思われる。

- 3) 詳しくは今村 (2007) をご参照。
- 4) 下記の指摘が参考になった。

例) A : 昨日、どうして休んだんですか?

B① : 雨が降っていたからです。

B② : 雨が降っていたんです。

ここでは、B①の場合は、Aさんが事情[β=雨が降っていたこと]を知っていることを前提としており、B②は、Aさんが事情[β=雨が降っていたこと]を知らないことを前提としていると田野村 (1990) が解説している。

ここで注意すべきは、Aさんが知っているかどうかの問題は、現実にはAさんが[雨が降っていた]

ことを知っているかどうかの問題ではなく、Bさんがどう判断したかによるという点である。(是澤 2003 : 24)

- 5) その問題についての指摘も少なくない。例えば、「これまでのフォーカス研究は様々な概念を混同しており、そのために理論が複雑化するだけでなく、経験論的問題も少なからず持っていた」。(小林 2009 : 30)
- 6) 詳しくは劉鑫民 (1995)、黄瓚輝 (2003) をご参照。
 认为焦点是新信息，或者认为焦点是非预设的部分，是对焦点的定义中最常见的说法。但是这两种说法都已被指出存在着一定的弊端。(黄瓚辉 2003)
 また、小林 (2009 : 23) は『『新情報』は相対的であるため、より新しい新情報があることを妨げない。逆に、フォーカスは『最新情報』であるので、文中に一つしか現れない。』と述べているが、「新情報」と「焦点」を区別すべきだという点に同意する。
- 7) 詳しくは方梅 (1995) を参照。
- 8) 詳しくは王光全 (2003) を参照。
- 9) 詳しくは南不二男 (1993) を参照。
- 10) 以下の議論からもその特徴が示唆されている。
 「彼は頭が痛いんです」を例として説明すると、次のようになる。日本語の心理表現では、「彼は頭が痛い」は表現として成り立たない。人称の制限を受けるのである。しかし、例えば「んです」を付加すると表現として成立する。この点に注目して「んです」の特徴を考えてみよう。これは、彼の心理 [頭が痛い] を、話し手が、何らかの状況 (情報) から理解して、断定した表現と見ることができ。そして「んです/んですよ」はその判断を他者、つまり他の人に伝達する機能をもつ。この点に関連して、よく指摘される現象がある。つまり、ニュース放送ではニュースの客観性を重視し、事実を伝えることのみを目的とするため、ニュースの伝達者の判断は不要であることからニュースの伝達に「んです」は使われないというものである。これもまた、「んです」の特徴を考える上で重要な指摘である。(是澤 2003 : 21-22)
- 11) 注 5) を参照。
- 12) 番号は本稿での順番に変えた。

参考文献

- [1] 庵功雄「教育文法に関する覚え書き—スコープの「のだ」を例として」『一橋大学留学生センター紀要』(3)、2000、33-78
- [2] 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク、2000
- [3] 石黒圭「「のだ」に関する一試論」『一橋大学留学生センター紀要』(3)、2000、43-58
- [4] 今村和宏「「のだ」の発話態度の本質を探る：「語りかけ度」と「語りかけタイプ」」『一橋大学留学生センター紀要』(10)、2007、37-48
- [5] 菊池康人「のだ (んです) の本質」『東京大学留学生センター紀要』(10)、2000、25-51
- [6] 小泉保『言外の言語学—日本語語用論—』、三省堂、1990
- [7] 小金丸・春美「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』(9)、1990、72-82
- [8] 小林亜希子「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』(136)、2009、121-151
- [9] 是澤範三「日本語教育における「のだ」について」『日本言語文芸研究』(4)、2003、19-32

- [10] 戸次大介・川添愛・片岡喜代子・斉藤学「日本語における前提テストの再考」『信学技報』(7)、2006、1-6
- [11] 南不二男『現代日本語文法の輪郭』大修館書店、1993
- [12] 方梅「汉语对比焦点的句法表现手段」『中国语文』(4)、1995、279-288
- [13] 黄瓚辉「焦点、焦点结构及焦点的性质研究综述」『现代外语』(4)、2003、429-438
- [14] 刘鑫民「焦点、焦点的分布和焦点化」『宁夏大学学报』(1)、1995、79-84
- [15] 王光全「过去完成体标记“的”在对话语体中的使用条件」『语言研究』(12)、2003、18-25
- [16] 袁毓林「句子的焦点结构及其对语义解释的影响」『当代语言学』(4)、2003、323-338
- [17] Kuno Susumu. Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy. The University of Chicago Press. 1987.
- [18] Lambrecht, Knud. Information Structure and Sentence Form. Cambridge University Press. 1994.

例文の出处

- (マ) : 阿刀田高『マッチ箱の人生』講談社、1984
- (新) : 木原浩勝・中山市朗『新耳袋第二夜 現代百物語』角川書店、1998
- (き) : 星新一『きまぐれロボット』角川書店、1999

(平成22年10月25日受付、平成22年12月9日再受付)